

高位頸椎椎間板ヘルニアは高齢者で多いとされており、その原因を中下位頸椎の可動性の低下とする説がある。高齢者においては、歯突起後方の腫瘤の鑑別診断として椎間板ヘルニアも考慮すべきと考えられた。

7) 自転車のハンドルによる腹部鈍的外傷の1小児例

内藤 真一・新田 幸壽 (新潟市民病院)
荒井 洋志 (小児外科)

症例は3歳の男児。

自転車の練習中に転倒した際に腹部をハンドルにて打撲して受傷後、強い腹痛と嘔吐を主訴に来院した。腹部CT検査にて十二指腸壁内血腫が認められたが、十二指腸自身の破裂などの損傷については完全には否定できなかった。

開腹して十二指腸の損傷がないことを確認し、漿膜下の血腫を可及的に除去した後、胃瘻、胆嚢瘻を造設した。術後8日目の胃瘻造影では十二指腸の通過障害が残存していたが、15日目の造影では通過障害も改善しており、経口摂取も可能となり、第24病日に全治、退院した。

8) 頸動脈病変における B-flow imaging の有用性について

榛沢 和彦・諸久 永 (新潟大学)
林 純一 (第二外科)

最近超音波機器においてビームフォーマーのデジタル化により送信する超音波の波形自体に coded excitation: 符号化パルス (位相変換) を加えることができるようになった。これにより超音波の単なる反射波としての情報以上の高度な情報が得られるようになり、プローブの周波数の壁を越えより小さな物体の描出が可能になった。さらにデジタル化された超音波信号のサブトラクションを行うことで赤血球などの小さな物体の動きを可視化できるようになった。これが B-flow である。我々は LOGIC 700 (GE 横河) の 10 MHz リニア型プローブにより B-flow を頸動脈エコーに応用したところ、より小さな潰瘍病変が描出できることを確認した。これはプラーク病変が敷石状になり、その間に血流が描出されるものである。この現象は海綿状型の潰瘍病変の病態解明に寄与するものと思われた。B-flow は符号化パルス法の一つの応用であり、今後はこうしたデジタル技術の応用でさらなる画像処理が期待される。

9) 肺動静脈瘻に対する塞栓術

山本 哲史・松月 由子 (長岡赤十字病院)
伊藤 猛・西原真美子 (放射線科)
田辺 嘉也・三上 理 (同 呼吸器内科)
吉村 直彦・木村 元政 (新潟大学)
斎藤 博之 (斎藤 医院)

肺動静脈瘻は先天性の毛細血管の欠損で、シャントや脳膿瘍・咯血などの重篤な合併症を高率に発生し、死亡率も高いため本症と診断がつか次第積極的に治療すべき疾患である。塞栓術は手術に比して侵襲が少ないこと、複数広範の病変を対象に出来ることなどから本症のよい治療法である。文献的には流入動脈で塞栓する報告が多いが、流出静脈にかけて径が拡大する型が多く塞栓物質の逸脱が生じる可能性があることや、正常肺動脈分枝塞栓を避ける意味から、拡張した瘻に金属コイルを留置する方法を主として施行した。当院で経験した3症例の提示と塞栓術の内容・具体的な手技に加え、文献的に得られた知見を報告した。

10) 当院での咯血に対する BAE 治療例について

楚山 真樹・安住利恵子 (国立療養所西新潟中)
三浦 努* (中央病院 放射線科)
斉藤 泰晴 (同 内科)
木村 元政 (新潟大学)
放射線科
*現 長岡赤十字病院内科

96年7月から99年6月にかけて、当院放射線科にて気管支動脈塞栓術を施行した、非腫瘍性肺炎による咯血症例15例に対し、以下の3点について検討した。

1) 症例の基礎疾患について

咯血の非腫瘍性基礎疾患については、諸外国、本邦ともに肺結核、気管支拡張症、肺アスペルギローマの報告が多いが、自験例においても同様の傾向であった。

2) 塞栓動脈について

近年では初期制御成績向上のため、体循環動脈の確実な塞栓が重要視されてきている。

3) 治療成績: 短期と長期に分けて検討した。1ヶ月以内の咯血制御率は93%であり、BAEは初期治療として有効であるといえる。

BAE後の長期予後はその基礎疾患によって異なり、再咯血防止には、基礎疾患のコントロールも重要である。